

元気が出る政治社会学書

本書は、タイトルを見ただけではエッセイのようでもあり、心理学書のようにもあるという印象を受けるが、著者は政治社会学者であり、本書も、現代社会学理論と体験とを縦横無尽に用いて書いたものである。

「政治とは他者を動かすこと。政治社会学とは、人間の生が他者を動かさないではないその仕組みを探究する学問だ」とする著者

動的分析などの「政治の社会学」や思想のこね回しである「政治社会学」よりも人間に戻ってくるぶん面白いとする。

つまり、政治社会学は人間から出発して人間が作り上げた事象としての政治に

やさしさの闘い

「歩くとは、家も地位も権力も持たないこと。従って、共同体を存立させる所

栗原 彬 著

有の蓄積を回避する象徴行動といえる」とし、歩く人の典型としてマハトマ・ガンディーをあげ、水俣病患者とともにある石牟礼千三さんをおげる。水俣病や三里塚から多くを読み取るうとする著者は、何も持たず、黙々と歩く人びとの視点を

「政治とは他者を動かすこと。政治社会学とは、人間の生が他者を動かさないではないその仕組みを探究する学問だ」とする著者

至り、そこから新しい人間

たり、誰かが歩くのに連れ

つばら俗世の分析や理念の構築がイメージされるが、



栗原 彬

立つて歩いたり、歩きながらの出会いや歩いて到着したところで起こったことが綴られている。それは、学者ならではの資料をつなぎ合わせた学問ではなく、自らの体験を、深く堆積させた知識と融合し、内在化させた所産であるといえる。

著者のいう政治社会学には、科学を基盤としながらも「詩学」が含まれ、人間の生命の息吹きが感じられる。そして、そこには人間を丸ごと肯定している著者の哲学があり、励ましがあ

税。

新曜社／二、四〇〇円十